

R. M. Dancy, *Plato's Introduction of Forms* (Cambridge University Press, 2004, xii+348p.)

太田和則

プラトンの対話編の間に、彼の思想的発展の跡が見られるか否かということは、悩ましい問題である。研究者たちはひとまず、各対話編を、執筆年代に沿って或る順番に並べることができるという点では同意する。だがその順と平行して、プラトンの考え方が発展していった形跡があるかという点、「ある」と答える発展的 (developmental) 解釈の派閥と、「ない」と答える統一的 (unitarian) 解釈の派閥とに分かれてしまっている。

本書は、このうちの発展的解釈の派閥を擁護する目的で書かれた、プラトン哲学の研究書である。本書は、中期の対話編以降で見られるプラトンのいわゆるイデア論が、初期の対話編で行われていた或る作業の発展した成果として導入されたと主張する。その作業とは、大雑把に言えば、人々が用いる一部の言葉の意味を定義するという作業であったとされる。

本書の主張は、具体的には次の①～④の説明をもとに行われる。①初期の対話編は、それぞれが一個の実践的な問題に関わる問いを立て、その問いに答えることを主題にしていた。②それに答えるためには、個々

の問いで中心的に用いられている言葉の意味を定義しておくということが必要とされた。③そうした定義には、まず或る三つの条件を満たすことが要求された。④中期に登場したイデア論において、イデアは単なる定義とは異なったものだが、同時にまた、先の三つの条件を満たすものでもある。

本書は、導入部 (一章) 以降の主要部を、扱う対話編の時期ごとに区分している。比較的初期の対話編をまとめて扱う、長大な第一部 (二～八章) では、上の①～③の説明が試みられる。対照的に短い第二部 (九章) は、過渡的な時期に分類される『メノン』一編に充てられ、この対話編の繊細な特徴の分析に費やされる。そして中期対話編を扱う第三部では、『パイドン』と『饗宴』を考察範囲として、いよいよ④の説明が試みられる (十～十四章)。以下では、各部の内容をもう少し詳しく見ることにしよう。

第一部で本書は、初期の対話編で、言葉の意味の定義という作業が必要視された過程と、その作業の特色を説明する。

本書によれば、初期の対話編はいずれも、例えば「勇氣」(in 『ラケス』) のような言葉を用いて、「○○のような訓練は兵士をより勇氣あるものにするだろうか?」といった実践的な性格の問いを立て、それに答えるということを主題としていた。しかし、そのためにはまず「勇氣とは何か?」といった問いへの答えを確定しておくことが必要とされた。本書は、「勇氣」のような言葉について、この「～とは何か?」の答えを

確定する作業を、その言葉の意味を定義する作業として理解する。そのうえで初期の対話編では、先の実践的な問いに答えるために、この種の定義という作業が必要視されていたのだと説明する（二章）。

本書が反対する統一的解釈の支持者は、アイデア論が、初期の対話編で既に導入されていたと主張する。そうする根拠は、初期からしばしば「正しさのようなものがある」（in『プロタゴラス』）といった、一部の言葉に関する或る種の存在承認が見られることにある。だが本書は、こうした承認は各場面で定義すべきトピックが何かを決めるものに過ぎず、アイデア論が導入されていると見なす根拠にはならないと批判する（三章）。

本書は、初期の対話編では定義に三つの条件が要求されていたと論じ、それぞれの要求の特徴と、相互連関の問題を論じる。要求の一つめは、「置換可能性の要求」（Substitutivity Requirement）——言葉の意味の定義とは、或る文にその言葉が登場する際に、登場するその言葉をどれだけ定義で置き換えても元の文の真理値が保存される働きを持たなければならない。二つめは「範型の要求」（Paradigm Requirement）——言葉の定義とは、或るものがその言葉を名前として当てはめられる事例であるか否かを決める、範型としての働きを持たなければならない。三つめは「説明の要求」（Explanatory Requirement）——言葉の意味の定義とは、或るものがその言葉を当ては

められる事例である理由を説明する働きを持たなければならない（四～六章）。また本書は、特に範型の要求と説明の要求については内容上の強い結びつきがあるとしたうえで、初期の対話編では時折、これら二つが融合する形で、因果の「転送説」（Transmission Theory）という理論が導入されていたと補足する。第三部で本書は、この「転送説」に関しても、後のアイデア論はその発展形を含んでいると説明することになる。ただし本書によれば、この理論自体はまだアイデア論の存在を含意しない。そのことは、アイデア論の批判者であるアリストテレスでさえ「転送説」を支持していた例や、アイデアの「分有」等に関わる重要語句の初期の用法の特徴などを見ることで、確認される（七、八章）。

第二部で本書は『メノン』を扱い、この対話編が持つ、初期から中期への過渡期的な特徴を分析する。例えばそこでは、定義に対する、さらなる「統一の要求」（Unity Requirement）が登場する。その要求によれば、言葉の意味の定義とはその言葉に関して、或る統一的な「相」（form）の存在を保証する働きを持たなければならない。具体的に言えば、二つ以上のものがそれぞれ同じ意味でその言葉を当てはめられる場合、それらのものに対してその言葉が（いわば「多に対する一」となる）或る同じ相を持つようにしなければならない。このような要求の登場は、後のアイデア論へ近づく一ステップであると評価される（九章）。

第三部で本書は、『パイドン』、『饗宴』といった中期の対話編を扱い、この時期に登場したアイデア論に対する、初期からの影響を確認する。

はじめに本書は、『パイドン』序盤の、正しさや善さそのものがあるとする議論に着目する。これらがあるという発言自体は、既に見たように単にトピックを確定するものとして、アイデア論と関係なく理解できる。だが『パイドン』のうちの周辺部ではさらに、正しさや善さそのものは肉体的な知覚を受け付けけないという「知覚不可能性の理論」(Imperceptibility Thesis) が導入されている。本書はこの理論を、単なる定義とは異なるものとしてアイデアを特徴づけるものと解釈し、ここ『パイドン』の序盤に、アイデア論誕生の一場面を見る(十章)。

以降の章では、『パイドン』、『饗宴』の具体的なテキストの読解と平行して、アイデアの主たる特徴の分析と、その特徴と定義の作業との関連の考察が行われる。まず、『パイドン』中盤では、互いに等しいと感覚される日常的なものと「等しい」のアイデアとが、それらの等しさに関して同一でないとする議論が登場する。これは前者が特定の状況と相対的に「等しい」の事例であったり(相反する)「等しくない」の事例であったりするのに対して、後者つまりアイデアが「等しくない」の事例であることは決してないという議論に由来するとされる。本書は、アイデアと感覚対象を区別するこのような議論を「相対性からの議論」(Argument

from Relativity) と呼ぶ(十一章)。相対性からの議論は『饗宴』にも見出され、こちらでアイデアは、行為なども含むより一般的な意味での個別的事例全てから区別されているとされる(十二章)。また『パイドン』終盤では、初期の因果の「転送説」の発展形として、いわゆるアイデア原因論が登場する様子が説明される(十三章)。

相対性からの議論と原因論の二つを通して描かれるアイデア論の分析にもとづき、本書は、アイデアが(単なる定義とは異なるものでありながら)初期の対話編の中で定義に要求されていたような三条件を満たす性格のものであると結論する(十四章)。アイデア論の導入は、言葉を或る仕方で定義するという、初期の作業の発展の成果なのである。

各部の紹介は、以上で十分であろう。

プラトン哲学の解釈書としての本書の性格について、この他に、特筆すべき二点を挙げたい。一点めは、対話編の議論構造の分析を重視する本書の基本姿勢である。本書の導入部の解説によれば、近年、プラトンの研究者たちは彼の思想的発展の問題と別に、各対話編を劇作品として文学的に読むか、論考として分析的に読むかというアプローチの点でも態度を分けている。二つのアプローチは必ずしも対立するものではないが、本書は対話編が特定の推論を提出しているという点を強調し、分析的アプローチの重要性を積極的に押し出している。しばしば曖昧な形で提出されるプラトンの

議論に対して、論理的に明快なパラフレーズがふんだんに用いられるおかげで、テキストの流れは追いやすくなっている。同様のアプローチをとる研究は少なくないが、本書ほど突き詰められている例は稀だろう。

特筆すべき二点めは、本書が、日常的な感覚の対象とアイデアとの区別に関して、アリストテレスによるプラトン解釈に由来する「流転からの議論」(Argument from Flux)の存在を支持することである。流転からの議論(以下、F議論)とは、諸物が常に様々な変化を受け入れる一方で、アイデアはそうした変化を一切受け入れないとする議論である。本書が中期のアイデア論について認める相対性からの議論(以下、R議論)のようなものは、研究者たちの間では、F議論と必ずしも両立するとは見なされていない。少なくとも、文字通りに見る限り、二つの議論は別物である。だが本書は、そもそも、R議論とF議論は同一視できるものだと主張する。もしこの同一視が妥当であれば、アイデア論に関するF議論の存在は、確かに帰結するだろう。それを考慮すると本書はここで、アリストテレスによるプラトン解釈の意味とその妥当性を、一つの点で見直す契機さえ与えていると言える。

しかし以上の二点に関して、残された問題もある。まず一点め。本書は、各所の細かい議論については、多く明晰な解釈を提出している。だが、全体として提示しようとする、初期から中期への発展的結びつきという筋道は、打って変わってはっきりと

示されたようには見えなかった。例えば、本書はその筋道を示すという目標から、時に大きく脱線しているように思われた。特に『メノン』や『パイドン』における想起説や仮説的方法の理論等の、第二部以降での極めて詳細な取扱い(私はこれらを、先の内容紹介から省いた)が、どうしてここまで必要だったのかは、不明である。

問題の二点め。R議論とF議論の同一視は、本書の内部では実際のところ、十分に正当化されていないと思われる。例えば、この点に関する導入部での説明は、F議論を軸としたアリストテレスによるプラトン解釈をどうすれば整合的に受け取れるかという問題意識を既に帯びており、初めからその解釈を——すなわちF議論の存在を——退けるようなオプションをあまり真剣に考慮していないように見えた。他にも、現にR議論が登場すると見られる一部のテキストについて、F議論との連関が意識されやすい——しかし語学的な問題から、従来は必ずしも有力視されていない——ような写本を、その点を特に弁護することなく採用するなど、いささか単純な対応を行っていることには注意すべきである。

とはいえこれらの問題は、本書の根幹を傷つけるものではない。大雑把とはいえ以上の紹介が正しければ、本書は、発展的解釈の擁護と分析的アプローチの可能性の開拓の両方で、一定の成果を収めたと言える。初期から中期のプラトン哲学を研究する人にとっては、精読に値する研究書だろう。